

エジプトの政変を考える

開倫塾

塾長 林明夫

いつの世にも、国民が政治に期待するのは自由と繁栄。自由とは、自由に思い、考え、表現し、行動できることが憲法によって保障され、実際に守られていること。繁栄とは、一部の人たちだけが豊かなのではなく、大多数の国民が普通の生活をする上であまり困らないだけの収入が得られること。

エジプトでは、ムバラク大統領が就任以来 30 年もの長い間「非常事態令」を敷き、国民の基本的人権を制約したため、国民は自由ではなかった。また、カタールや UAE、サウジアラビアなど石油産出国と比べ、一人あたりの GDP も極端に低く、人間として最低限度の生活ができない国民も多い。

このようなときには、似たような状況のアルジェリアのような近くの国で起こった政変や、あまりよいことではないが焼身自殺など自分の身を犠牲にしてまでの訴えなどをきっかけにして、選挙などの通常の手続きを経ないで政治が大きく変わることがある。このエジプトの激しい動きが、ヨルダンやイエメンなど近くの国々の政治のあり方に大きな影響を与えている。

ここ数日の中東や北アフリカ諸国での出来事は、その国にとっては、日本の大化の改新や戦国時代、明治維新にあたるような歴史に残る大事件だと思われる。

世界の四大文明の一つ、エジプト文明がおこり、「エジプトはナイルの賜(たまもの)」とよばれた地で、今、なぜ、何が起きているのか、これからどうなるのかを、地図帳で場所を確認しながら新聞や TV 報道などで学んでほしい。

これから数か月の動きは、エジプトの将来を決める大事な時期。大統領辞任、総選挙、憲法改正、新しい政治の始まりと、自由と繁栄に向けての長い長い試練がエジプト国民を待っている。

このエジプトの出来事を通じて、政治とは何か、どのような政治のあり方がよいのかを、是非一度じっくり考えてみよう。

「権力を持つ者は腐敗しやすい」というモンテスキューのことばや、三権分立、法の支配、日本国憲法の三大原理である国民主権、基本的人権の尊重、平和主義などをもう一度勉強してみよう。